

名寄市立大学

# 授業改善通信

第5号(2011年4月発行)

## 目次

1 大学教育の改革と授業改善	1
2 学生授業評価アンケート実施報告	2
3 本学授業の紹介(高橋正子准教授担当「給食経営管理実習」)	3
4 よりよい授業をめざして=第5回ピアレビュー・授業公開実施報告	5
5 授業改善の実践例の紹介	
(1) 大学教育学会2010年度参加報告	6
(2) 本学e-ラーニングシステムの改善について	7



## 1. 大学教育の改革と授業改善

現在においては、大学の「質」も公開される時代になってきています。その中で「授業改善」は大学の質向上の中核ともいえるべき必須の課題であるという点については、共通の認識となってきています。本学においても「授業の質」向上が重要であることは、11月3日の全学FD研修会での論議や2月10日学長と学生の「白熱教室」での論議等でも明らかです。

また授業改善を目指し、毎年ピアレビューが実施されていますが、必ずしも多くの教員の参加・参観を得てはいませんでした。すぐれた授業を見せてもらうことは授業改善にとって、有効な手段の一つではありますが、特定の教員による「ピアレビュー」のみでは、なかなか一人ひとりの授業「改善」には繋がらないのが現状でした。また大学においては、学科・専門分野間の授業内容の違いが大きく、授業形態においても「講義」「演習」「実習」と大きな違いがある点もピアレビューのみではあまり「授業改善」が進まない一因と思われました。

2010年度の授業改善委員会では、「授業改善」と「ピアレビューまたは授業公開」の関連について、次のような論議をしました。

- ①本来「授業改善」は授業者自身の課題意識に基づくものである
- ②どの次元、どのレベルの授業者においても授業改善の課題は存在する
- ③「授業公開」をすること、準備をすることで、授業者に改善点が見えてくるであろう
- ④職員を含めた全教職員を参観の対象にすることで、より一体感のある大学づくりを目指すことができるのではないか

以上のような論議を踏まえ、11月の教授会において次年度より

- ①授業を担当する全教員の授業公開
- ⑤全教職員による授業参観

を行うことを提案しました。

授業公開にあたっての方法と条件は次の通りです。

- 1)一斉公開週間を前期1回(7月上旬)、後期1回(12月上旬)設ける

- 2)授業を担当する全教員は、前期または後期のいずれかで1回（以上）の授業を公開する。
  - 3)授業者は、その予定・内容・条件等を授業改善委員会を通じ全学に通知する。
  - 4)授業の公開は、原則公開することのみを義務とする。
  - 5)授業者は、授業後授業の感想・意見等を授業改善委員会に報告する。
  - 6)授業の公開にあたっては授業者が公開条件をつけることが出来る(例、参観人数を限定する、学科内あるいは外のみ公開、授業後討論会有、アンケート記入無あるいは必須など)。
  - 7)やむを得ず公開できない場合は、授業改善委員会に連絡する。
  - 8)授業を参観する者は、1週間前に参観を希望することをメールで授業者に連絡する。
  - 9)授業に条件がある場合は、参観者はその条件を守ること。
- この方法や条件については、今年度の試験的な「授業公開」を踏まえて、授業改善委員会で検討・改善していくことになっています。

今年度は、提案が遅くなり、十分な準備期間がとれませんでした。12月13日（月）～17日（金）の期間に一斉授業公開日を設け、授業公開を引き受けてくれる教員を全学に募集しました。その結果、7名のべ11授業の公開を得ることができました。

授業公開にあたって、授業改善委員会としてその他の条件は一切付けませんでした。「授業の見せっぱなしでは効果がないのではないか」という意見もあると思いますが、先に書いたように「授業改善」は授業者自身の課題意識であると捉えるならば、行うこと自体に意義があるのではと判断しています。次年度からの全教員による「授業公開」が実現していけば、関心のある授業を参観し、自らの授業改善に役立てることもより容易になっていくものと考えます。

授業改善委員会は、授業公開の提案とともに「Teacher's Tool Box」を学内HP上に立ち上げ、授業技術の向上のためのアイデアや利用可能なフォーマットを共有する場を構築することもあわせて提案しました。

やや唐突で乱暴な提案の部分もあるように思いますが、名寄市立大学が最北の公立大学として小さくともキラリと輝くためにも、学生が生き生きと学ぶ場として「授業」を改善していくことは、待ったなしの課題です。今回の提案をたたき台に大いに論議して頂きたいと思います。

## 2. 授業評価アンケート改善の取り組み

### 1. はじめに

2010年度の授業改善委員会の活動の一つとして、前期・後期に行われている「授業評価アンケート」改善案作成の取り組みを行いました。授業評価アンケートをさらに役立つものとするため、質問項目を見直す必要があるのではないかという見解に基づき、学生の満足度を高め、教員にとって授業改善の良い資料となることを目標としました。委員会における検討の結果、次に記すような点に留意しながら授業評価アンケートの改善案を作成することができました。

### 2. 改善案作成のポイント

まず、従来のアンケート項目にはなかった、学生自身の態度・気付きに触れる項目を設けました。授業は教員だけの努力で完結するものではなく、学生と共に作り上げるものであるという理念を明確にするためです。

それにより、A.授業科目について、B.教員について、C.学生自身について、という3つの群に質問項目が分類されました。また各群に偏りがないように4項目ずつ質問を配置しました。そして学生に理解しやすく、教員の授業改善に役立つ適切な質問内容を選択するようにしました。従来のアンケートの質問にやや意図が曖昧なものが見られたので、簡潔で分かりやすい文章を用い、質問内容が的確に読み取れるよう整理しました。

自由記述の欄は、従来は記述を促す文章がやや限定的であったため、学生が自由に書けるような内容に変更しました。

オムニバス授業に関しては総合的に回答を求める方法は適切ではなく、各担当教員それぞれについての授業評価を求めるべきであると考えた結果、従来のアンケートにあった各担当教員に対する感想や意見の欄を削除しました。オムニバス授業でも、担当教員ごとにアンケートを実施する方針を提案しました。

### 3. おわりに

以下に、提案した授業評価アンケート項目案を掲載しますのでご覧ください。2011 年度後期での実施を目標に検討を重ねる所存です。

#### 【参考資料 2011 年度授業評価アンケート項目 (案)】

##### A. 授業・科目について

1. シラバスまたは授業で説明された授業の目的・意義を理解できた。
2. 授業の目標・内容は授業概要 (シラバス) などで説明されたものに沿っていた。
3. この授業の成績評価方法について十分な説明があった。
4. この授業の内容と分量・進度はちょうどよく、理解しやすかった。

##### B. 教員について

1. この授業に対して、教員の熱意や誠意が感じられた。
2. 教員の話し方・授業の進め方は明瞭でわかりやすかった。
3. 教員は学生の質問・発言等に適切に対応していた。
4. 教員は授業の構成、授業方法、教材などの工夫をしていた。

##### C. 自分自身について

1. 私はこの授業に意欲的に出席していた。
2. 私は予習や復習などをして、授業を理解するように努めた。
3. 私の授業態度は、よかった。
4. 私はこの授業の目的・ねらいにふさわしい基本的な知識、新しい考え方を得ることができた。

##### D. この授業について、意見や感想があれば自由に書いてください。

## 3. 本学授業の紹介 (高橋正子准教授担当「給食経営管理実習」)



給食経営管理実習は、特定多数の人に給食を提供するために理論を学び、それを実習する授業です。対象者の決定、献立作成、調理、提供などのシステムやそれらのためのサブシステムを考えながら実習してゆきます。また他の授業と大きく異なる点は、作成した給食を学内の学生・教職員に食べてもらい、評価してもらうという点です。食事を提供するためには様々な要件や配慮が必要です。それを実際に実習する授業なので、1 年生からの学習の成果が表れます。



実習はクラスを隔週に実習、実習準備の 2 つに分け、仕事内容ごと役割分担されてグループになり、本年度は各役割 4 回(食事提供は 8 回)で食事を提供しました。



実習は朝8時半集合です。実習班がそろったら、各々の健康チェックです。その後実習着に着替え、下処理室に入ります、作業開始です。まず水質検査を行います。材料の下処理をします。下処理をしながら保存用の原材料をとっておきます。これらは食中毒などが発生した場合に検査をするためのもので、調理済みの食品も保存さ



れます。材料の下処理が終わったら、調理室に移動して、調理を始めます。大型の機械の扱い方もここで学びます。大量調理ならではの回転釜、スチームコンベクションオーブン、色々な調理に利用できるティルティングパンなどがありそれらの操作をしながら調理します。100食作成するためには価格、時間を検討しますが、一番基本的なことは安全な食事の提供です。1回目の実習では、時間配分が出来ず、食事に来た教職員・学生の昼食の時間に間に合いませんでした、2回目の実習では味つけがうまくゆき

ません、3回目からは予定ではなく、その場で考えて行動するようにしないと食事が時間内に提供できないと気づき始めました。管理栄養士役の人が積極的に指示を出す、調理・配膳が終わると器具洗浄、食器洗浄に周囲をみて自ら動くようになりました。大量の食器を洗うのは初めてでしたが、実習が終わることには要領よく作業することができるようになりました。最後の反省会では、事前の準備が非常に大事だということが分かった、もう1回実習すると完璧にできる、食券を売ることが大変だった、また実習中に事故、怪我もなく無



事に終了した事、自分たちは頑張って、実習の目的が達成されたと感じている、などの自己評価がありました。各自それぞれ達成感を得られたようです。それには、やはり、全学の皆様の体を張った協力があつたことも大きな力だと思います。

お金をいただくには、まだまだ十分とは言えない食事の提供でしたが、実習終盤には学生は、非常に成長いたしました。ともすると部分的な仕事で終わり、楽しそうな授業のように見えますが、朝早くから作業、そして大量の食器の洗浄、厨房の清掃など腰を下ろす暇もなく働きました。緊張の中、頑張って作業を行いました。実際の経験を通して、仕事を身に付けて行く事が目的の授業です。今後はさらに学生が能率よく積極的に動くことを考えて、授業の工夫をしなければと考えています。この実習が栄養士としての仕事の基礎的な部分に



なります。特定多数の人のために、安全で、その人の健康や疾病の予防、改善のための食事をつくるというイメージを持ち、次年度校外実習に臨むこととなりますので非常に重要な実習となります。管理栄養士は管理、統制した中で指示のもと動くのではなく自分で気づき、自分の役割を意識し、自主的に行動できる事が求められます。学生の実習を見ていると歯がゆいこともありますが、気づくまで待つことにしています。臨床ではあつてはいけない事ですが、大学内であるからこそ少々の失敗も許されると思います。毎回いただく評価には厳しい指摘とお褒めの言葉があり、これらもまた学生の反省と励みになっています。全学の教職員の協力を得て展開される貴重な授業です。この授業を終了して、3年生は春に校外・臨地実習へ臨みます。

## 4. よりよい授業をめざして =第5回ピアレビュー・授業公開実施報告=

塚本智宏 教育原理第10講 「授業を受ける」(教職課程 S/E 1年後期)の授業公開

公開した本講義は、教職課程履修の一年生の授業の教育原理の一コマである。

第10講 「授業を受ける」という十回目の講義で、「授業とは何か」「わかるとは何か」を前々回の講義で、また、「授業づくり」のプロセスや教材研究について、を前回の講義で学んだあと、本講時で、具体的な授業プラン(塚本オリジナル)を紹介し、後に検討することを予定した授業である。なお、この授業の公開は、開設年度にも行っているが、かなり改善されたものと自負している。

以下、授業の概要。

### ◎ 授業のテーマ

「歴史はどのようにして書かれるのか。」

伝説と歴史(ハーメルンの笛吹男伝説を素材に)を対比しながら歴史(学)とは何かの導入を意図したもの。

最終的にこの授業の工夫について考えてもらうことを意図

### ◎ 授業の目的

授業づくりの理論的な話をすでにしてはいるが、その上で、塚本のつくった授業(大学(高校)での世界史授業の構想と実践)を体験してらう。

### ◎ 授業の進め方 授業の工夫

<前半 伝説形成の追体験ゲーム>

伝説(ハーメルンの笛吹き男伝説)のでき方(民衆の歴史体験)を学ぶ。

ある歴史的事実にその周辺に創作的事実が付け加わり、何度も語り継がれるうちに、人々に受け入れられやすい(時代によって違う)歴史物語ができあがる。

<後半 前半ゲームを土台としての歴史の探究>

先のゲーム歴史的体験は、実は、本当の歴史的事実(1284年ハーメルンの子どもの失踪事件)と重ねられており、それが後半の授業展開の「授業導入」になっている。

後半の授業では、歴史を探究するに際してもっとも重要な資料(一次資料と二次資料)に触れ、その史料批判という歴史研究に不可欠な手続きについて、やはり述べる。

この授業のポイント

こういった授業は、一面、学生がゲーム感覚で参加することのおもしろさを体験することを意図した(学生の感想も実際そうであった)ものであるが、注意深い学生はそのゲームで経験することが後半の歴史を認識する体験の土台の装置となっていることにも気がつき、感激する。そこが伝えられるかどうか、この授業(一般に教授者の授業工夫という達成目標)の鍵である。一年次のこの段階で、将来四年次学生の実習での授業づくりを想定することは無理だとしても、続く2・3・4年教職課程の講義の「授業づくり」分野での学習の出発点として、授業づくりのおもしろさを伝えられたらと考えている。

## 5. 研究・研修会参加報告

### 1. 2010年度 大学教育学会課題研究集会 参加報告

2010年度の大学教育学会が、2010年11月27～28日、武庫川女子大学（兵庫県）にて、「キャリア形成における大学教育—ライフサイクルの視点から—」を統一テーマとして開催されました。その概略を報告します。

基調講演は、井下 理氏（慶應義塾大学）より「大学教育とキャリア形成—ライフサイクルの視点から—」という演題で行われました。その趣旨は、「キャリア形成」および「ライフスタイル」という観点設定から、大学教育を考察してみることは、今の時代、日本の状況を考慮するとき、大学教育に関心を持つわれわれにとって豊かな大学教育像を検討するために活発な議論を呼び込むことが可能となる、というものでした。

開催校企画シンポジウムは、「キャリア形成における大学教育—ライフサイクルの視点から—」をテーマに行われました。シンポジストは、福島秀行氏（武庫川女子大学）「武庫川女子大学におけるキャリア教育への取り組み」、川嶋太津夫氏（神戸大学）「今求められるキャリア教育の背景とその在り方」、田中毎実氏（京都大学）『「学問教育共同体」の現代的再編成について』、コメンテーターは大内章子氏（関西学院大学）、司会は矢野裕俊氏（大阪市立大学）、山崎洋子氏（武庫川女子大学）でした。大学を「多様な年代の多彩な人々がライフサイクル全体を通して織り成す、複合的なキャリア形成の場」と捉え、そのような視点から、大学教育について「複合的に」アプローチし、総合的な議論がなされました。

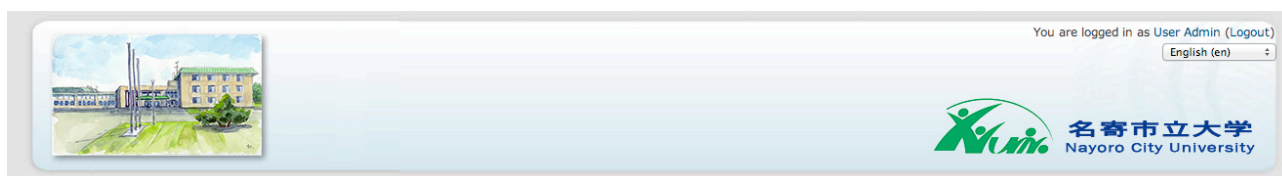
シンポジウムⅠでは、「構築中の学士課程教育：プロGRESS・レポート」をテーマに行われました。シンポジストは、串本 剛氏（神戸大学）「私学高等教育研究所学科長調査からみえる学士課程教育改革の現状と課題—学習成果を担保する二つの方式」、上 真一氏（広島大学）「広島大学における到達目標型教育プログラムの取り組み」、山本秀樹氏（関西国際大学）「アメリカ UMR に学ぶコンセプトマップを用いたカリキュラム構築の手法」、コーディネーター・司会は、川嶋太津夫氏（神戸大学）でした。各大学における学士課程教育の構築状況に関する学科長を対象とした調査の報告によって、全国的な構築状況課題が学会員に共有され、先導的な事例報告がなされました。

シンポジウムⅡでは、「SDの新たな地平—『大学人』能力開発に向けて—」をテーマに行われました。シンポジストは、清水栄子氏（公立大学協会）「アンケートの内容および調査結果の概要」、秦 啓治氏（愛媛大学）「カリキュラムに関する職員の関与とその可能性」、佐々木一也氏（立教大学）「当課題研究の総括と展望—これまでの議論とアンケート結果を踏まえて—」、世話人は佐々木一也（立教大学）、司会は本郷有紀子氏（桜美林大学）、寺崎昌男氏（立教大学）でした。現状における教職協働の必要性、その実態、教職員双方の相手に対する期待、目指す方向性など、教職員意識についての分析結果が報告され、そこからみえる課題について考察が加えられ、総括がなされました。

シンポジウムⅢでは、「共通教育のデザインとマネジメント」をテーマに行われました。シンポジストは、吉永契一郎氏（東京農工大学）「本課題研究の目的と計画」、濱口 哲氏（新潟大学）「新潟大学の全学共通教育のデザインとマネジメント」、中村博幸氏（京都文教大学）「京都文教大学における共通教育の15年」、コメンテーター 館 昭氏（桜美林大学）、企画者は佐々木一也氏（立教大学）ほか、司会は小山悦司氏（倉敷芸術科学大学）、木本尚美氏（県立広島大学）でした。大綱化以降に設立された京都文教大学、教養教育と専門教育との境をなくした新潟大学の事例が取り上げられ、共通教育についての議論が深められました。



## 2. 本学 e-ラーニングシステムの改善について



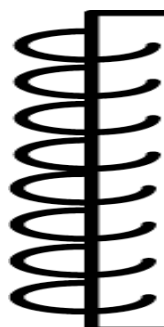
授業改善委員会は本学の学習過程管理システム[CMS]、いわゆる e-ラーニングシステムを運営・管理しています。そのシステムはムードル (Moodle) と言います。ムードルは、CEAS/Sakai, WebCT, Blackboard, 等の CMS と同じようにインターネットを使って、授業の資料、クイズやいろいろな教育的なコンテンツを提供できます。ムードルの主な特徴はムードルのソフトウェア自体は無料であることです。オープンソースソフトウェアとして、ユーザーは自由にダウンロード、使用、修正、さらに配布することができ、ムードルの開発は世界中のプログラマーおよびユーザー・コミュニティのチームに支援されながら継続されています。

2010年9月16日授業改善委員会がムードルの研修会を開きました。教員8人が参加し、ムードルの簡単なコース作成や基本操作をチャレンジしました。短い時間内にたくさんの機能を含んでいるムードルに慣れたという訳でもないのですが、もう一つの教育リソースとして認識が高められたと思います。ムードルおよびe-ラーニングを使いたい教員のサポート体制や全教員の認識向上が必要だと反省点があり、授業改善委員会の今後の課題の一つだと考えています。

2010年11月に大改造された Moodle 2.0 が登場しました。それと同時に日本国内のムードルユーザーが力を合わせて、2011年2月に高知市でムードル・ムート、いわゆるムードルの教育者や開発者による研修会が開かれ、「日本ムードル協会」が創設されました。オーストラリア出身のムードル主任開発者マーティン・ドゥギアマス氏は、日本まで足を運んで Moodle 2.0 とその後についての詳しい話をしてくれました。

残念ながら、本学のサーバーはまだ Moodle 2.0 に対応していません。2011年4月現在、本学のムードルはバージョン 1.9 です。最新バージョンではないのですが、問題なく使われています。今後、ムードルに関する情報や利用技術を得るために、授業改善委員会としては日本ムードル協会に入会し、研修会にも参加したいと思います。そして、進化し続けるムードル2に対応できるサーバー環境を、事務や管理職と相談しながら十分検討し、設置できればと思っています。

授業改善委員会へのご感想・ご意見をお待ちしています。各学科委員あてにお伝え下さい。



発行日：平成23年3月31日  
 編集・発行：名寄市立大学授業改善委員会  
 委員：メドウズ・マーティン（教養教育部）・  
 高橋 正子（栄養学科）・廣橋 容子（看護学科）  
 李 相済（社会福祉学科）・今野 道裕（児童学科）  
 以上 5名